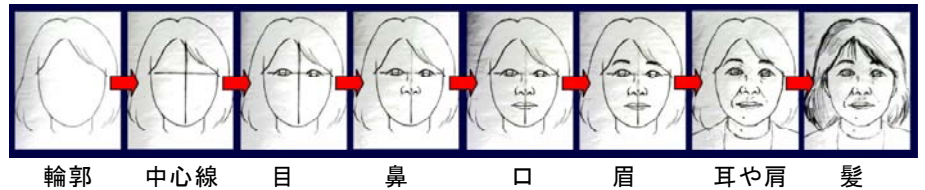


# 図画工作 美術 班

館林市立第三小学校 内藤洋子 教諭  
 邑楽町立邑楽中学校 久保田裕 教諭

## 小学校 5年 「自画像 “世界に一人だけのわたしを描こう”」

写實的に表現する力を伸ばすために、よく見て描く題材を設定し、描き方の基本をしっかりと指導する。



○パソコンを使ったプレゼンテーションと教師による演示で、自画像の描き方を教える。

○段階ごとに描き方のポイントを説明しながら、みんなで一緒に描く。

“教えるべきことをしっかりと教える”ことによって、児童の絵が変わる。「自分は描くのが下手だ」と思っていた児童にも、本人が納得いくような描画をさせることができた。よく見るための視点を与えたこと、見てとらえたことを絵に表すときに必要な知識や技能（顔の中心線を描かせる、輪郭の型や人の顔の基本的な配置や大きさを教える等）を教えたことは、児童に「よく見て描くこと」を達成させ、その楽しさを実感させる上で大変有効であった。



## 中学校 2年 「立体感と遠近感のある平面構成」

授業の中に交流活動を位置づけ、生徒同士が学び合い、創造活動の喜びを味わえるようにする。

①題材の導入時における意欲を高められるようにするための交流活動 ②発想を広げ、構想を深めることができるようにするための交流活動 ③表現のつまづきを解決することができるようにするための交流活動 ④鑑賞の場で創造活動の喜びを実感できるようにするための交流活動 を題材に応じて設定する。

発想・構想の段階、制作の段階では、授業の初めに交流活動を行うことで、生徒同士の学び合いから、一人一人に見通しをもたせ、表現をより高めることができた。作品の完成時に交流活動を設定することで、生徒に創造活動の喜びを味わわせることができた。交流活動は、明確なねらいのもとに回数を重ね、日常化することでその効果を大きく発揮できるものだといえる。



